

開発問題と福祉問題の相互接近

－障害を中心に－

森 壮也 編

2006 年 3 月

独立行政法人 日本貿易振興機構

アジア経済研究所

はじめに

本報告書は、2005 年度にアジア経済研究所で実施した 2 年間にわたって開催される予定の「開発問題と福祉問題の相互接近－障害を中心に」研究会の 1 年目の中間報告書として作成されたものである。

開発途上国の障害者の問題は、これまでその研究、政策実施のための基盤の整備等の必要性が言われながら、我が国では本格的な研究等が遅れていた分野である。開発途上国の貧困問題の解決のためには、貧困者の中で 20%から 30%を占めると言われる身体障害者の問題の解決は不可避である。農村部の障害者に至ってはほぼ 100%が貧困層であるとも言われている。開発研究はもちろんのこと、障害の分野の学術的研究である障害学の蓄積の中で、今般、ようやくその機が熟してきたと言える。国連やその他機関での障害についての枠組み開発と障害とを結びつけられる社会モデルへと変わってきており、さらに現在では、子どもや女性に続く形で障害者の権利条約と呼ばれる国際条約に向けての取り組みが国連で開始されている。条約案に向けての議論では、社会モデルに根ざしたアプローチから人権アプローチと呼ばれる開発途上国、先進国を問わず、障害者の人権を保障していく方向がより明確になってきている。こうした状況を踏まえて、世界的に「開発と障害 (Disability and Development)」と呼ばれるようになってきた本報告書で取り上げられている問題に対し、各国の障害者についても、福祉・慈善的なアプローチではなく、開発プロセスに参加する一員であるという認識からの開発アプローチの観点から取り組んでいくことは現在、喫緊の問題であり、それに資する研究を社会科学の観点から行うことが強く求められている。

これはとりもなおさず、障害者の問題に福祉関係者、障害関係者に限定された問題としてアプローチするのではなく、開発に関わるより多くの人たちの中での課題として、障害・障害者の問題を考えていく、すなわち開発問題の中での障害の問題のメインストリーム化への道程が始まったことを意味する。また障害をもつ人たちが開発過程に参加できるようになるためには、彼

らを縛っている社会的、経済的軛（くびき）についての認識の共有とそれからの解放（Unlocking）であるエンパワメントが必須である。メインストリーミングとエンパワメント、国際社会でも「開発と障害」へのアプローチの基本的姿勢として認知を得つつあるこの考え方に基づいて、本書も編まれている。本報告書は、経済学、法律学、人類学、社会学等からの学際的なアプローチで、「開発と障害」の現状、あるべき姿等について議論を交わした成果でもある。

本報告書の構成は、まず総論として、開発と障害の全体的な枠組みに関わる第Ⅰ部で、「開発と障害」のための基本的考え方についての議論、国連開発計画の人間開発指標の障害を念頭においた見直し、また実践のためのフレームワーク、開発援助という観点からこの問題に取り組むことの大切さを改めて論じた。次に第Ⅱ部として、国連で進行中である障害者の権利条約の経過を追った分析と法制から見た開発と障害ということで、障害者を法的に支援する枠組みである法的扶助とを行っている。最後に第Ⅲ部として、障害当事者の状況と問題を、西・中部アフリカのろう教育形成史、また開発の側から障害を取り込んでいく代表的な枠組みである CBR についての議論を整理した。

なお、当研究会においては、執筆を担当した委員の他にも講師として、国連 ESCAP でアジア太平洋障害者の 10 年の牽引役として長らく活躍された自らも車椅子ユーザーである高嶺豊琉球大学法文学部教授、人類学の立場から障害分野への鋭い切り込みをされた九州大学大学院人間環境学府の内藤順子氏に、それぞれお二方ならではのお立場から「開発と障害」の分野への切り込み方と現場でのご経験などをお話し頂き、研究会の議論に大きな刺激を与えて頂いた。毎回の研究会では、研究所内から、佐藤寛参事、重富真一参事、牧野久美子研究員、久保公二研究員にオブザーバーとして活発なご意見を頂いた他、議論に参加して頂いた。さらに、研究会の幹事である小林昌之主任研究員には、煩雑な事務的作業から編集段階の補佐まで研究会を支える裏方として力を尽くして頂いた、ここに記して感謝の意を表したい。

なお冒頭にも書いたように本報告書は、二年研究会の中間報告である。一

年目の成果として、最終報告書のための叩き台を提案させて頂いていることになる。このため、読者諸兄諸姉にあっては、ぜひご批判・忌憚のないコメントなど編者までお寄せ頂きたい。二年目の最終報告書に向けて、頂いたご意見等、最大限活用させて頂く予定である。

2006 年 3 月

編者

執筆者一覧

- | | | |
|-----|--------|-----------------------------------|
| 第1章 | 森 壮也* | 新領域研究センター
貧困削減・社会開発研究グループ長代理 |
| 第2章 | 野上裕生 | 新領域研究センター参事 |
| 第3章 | 久野研二 | 国際協力機構・チーフ・アドバイザー（障害者福祉） |
| 第4章 | 長瀬 修 | 東京大学先端科学技術研究センター特任助教授 |
| 第5章 | 小林昌之** | 開発研究センター 法・制度研究グループ長 |
| 第6章 | 亀井伸孝 | 関西学院大学 COE 専任研究員 |
| 第7章 | 中西由起子 | アジア・ディスアビリティ・インスティテート (ADI)
代表 |

* 研究会主査 ** 研究会幹事

目次

はじめに.....	i
執筆者一覧.....	iv
目次.....	v
キーワード.....	x

第Ⅰ部 「開発と障害」－基本的枠組み

第1章 『開発と障害』を考えるために必要なこと	
森 壮也.....	3
第1節 はじめに.....	3
第2節 なぜ『開発と障害』が登場してきたのか?.....	6
第3節 現在の『開発と障害』へのアプローチと その担い手の問題点.....	9
第4節 開発途上国の村落開発と障害者をつなぐ CBR.....	11
第5節 障害自助グループと開発－援助をめぐる観点.....	12
第6節 『開発と障害』をめぐるその他の問題.....	14
第7節 まとめ.....	15
参考文献.....	18
第2章 社会のバリアフリー度を考慮した人間開発指数の試み	
野上裕生.....	21
はじめに.....	22
第1節 「開発と障害」と社会指標.....	23
1. 「人間開発」アプローチと障害.....	23
2. 政策評価と社会指標.....	24

3. DALY の問題点	25
第2節 バリアフリーに向けた社会指標	27
1. 社会統計指標の役割.....	27
2. 日本の社会指標発達史における障害	28
むすび：今後の社会指標の課題	33
参考文献.....	35
第3章 開発援助と障害：実践のためのフレームワーク	
久野研二.....	39
第1節 はじめに	39
第2節 開発援助と障害：その課題	41
第3節 統合と分析のフレームワーク：	
ケイパビリティ・アプローチ	43
第4節 実践のフレームワーク：複線アプローチ.....	46
第5節 具体的な方法論：メインストリーミングのために.....	47
1. 障害政策：メインストリーミングの枠組み形成のために .	48
2. 障害教育－障害平等研修：	
メインストリーミングを推進する人材育成のために...	49
3. 開発の障害分析：メインストリーミングの指針と確認 ...	50
4. “草の根”からのメインストリーミング戦略：	
開発における障害へのコミュニティ・アプローチ...	52
5. 障害者の実施プロセスへの参加支援：	
一人ひとりの声を聞くために ...	54
第6節 フレームワークとツールを超えて：	
開発援助と障害の更なる課題 ...	55
参考文献.....	57

第Ⅱ部 法制度と「開発と障害」

第4章 障害者の権利条約交渉における開発と障害・国際協力	
長瀬 修	63
第1節 はじめに	64
第2節 障害者の権利条約に向けての歴史的背景	64
第3節 条約と開発・国際協力	65
1. 開発という文脈での条約提案	65
2. 特別委員会	67
第4節 まとめ	77
参考文献	81
資 料	82
第5章 中国の障害者法制と司法へのアクセス	
小林昌之	91
はじめに	92
第1節 「開発と障害」における「法」	92
1. 「社会法」の発展の流れ	92
2. 「社会モデル」の登場と権利アプローチ	93
3. 国際社会における司法へのアクセスの議論	94
第2節 中国の障害者法制	96
1. 障害者法制の発展	96
2. 中国障害者保障法の概要	97
第3節 障害者の司法へのアクセス	100
1. 中国における法律扶助制度の発展	100
2. 障害者に対する法律扶助制度の発展	103
3. 上海市の事例	105
4. 障害者の司法へのアクセスの課題	106

おわりに.....	108
参考文献.....	113

第Ⅲ部 障害当事者と「開発と障害」

第6章 ろう者によるろう教育事業：	
西・中部アフリカのろう教育形成史の事例 亀井伸孝....	119
第1節 はじめに：障害の社会モデルとその課題.....	119
1. 障害観の転換.....	120
2. 従来モデルの不備.....	120
3. ろう者をめぐるまなざし.....	122
4. 集団モデルの検討.....	123
第2節 ろう者の開発における障壁.....	125
1. ろう者の諸言語，手話.....	125
2. ろう者における開発の障壁.....	125
3. 誤った開発＝口話法教育.....	126
4. 手話による教育の復権.....	127
第3節 西・中部アフリカのろう教育事業.....	128
1. 世界最大級のろう教育事業.....	128
2. ろう者たちによる教育.....	128
3. フォスターの遺産.....	129
4. ろう者集団のエンパワメント.....	130
第4節 アフリカにおけるろう者の達成と課題.....	131
1. CMD が今日の開発に示唆すること.....	131
2. 手話言語集団を取り巻く課題.....	131
第5節 集団モデルの有用性と必要性.....	132
1. ろう者における開発が含むべき二つの要素.....	132
2. 集団モデルの有用性と必要性.....	133

参考文献.....	137
第7章 地域に根ざしたリハビリテーション（CBR）の現状と展望	
中西由起子 ...	139
はじめに.....	139
第1節 CBR の発展.....	139
1. 脱施設化に至る障害者ケアの概念.....	140
2. CBR の登場.....	141
3. CBR の普及.....	141
第2節 基本的アプローチからみた CBR の分析.....	142
1. 障害者支援の3つのアプローチ.....	142
2. アジアの CBR 実施状況の分析.....	144
第3節 CBR の概念.....	149
1. CBR の定義.....	149
2. CBR の主たる目的.....	150
第4節 実施体制.....	151
1. サービスの組織体制.....	151
2. 総合的 CBR プロジェクトの初め方.....	152
第5節 現行の CBR の問題点.....	155
1. 障害者の参加の欠如.....	155
2. CBR の日本の地域リハとの混同.....	156
第6節 CBR から IL へ.....	157
1. IL の歴史.....	157
2. CBR への IL の統合の可能性.....	157
終わりに.....	158
参考文献.....	160